

第6回ヨーロッパ麻酔学会印象記



マーガレット王女を迎えて盛大な開会式

第6回ヨーロッパ麻酔学会は1982年9月8日から15日までの1週間、ロンドンにおいて開催された。英国およびアイルランド麻酔学会の50周年と重なったこともあり、エリザベス女王がパトロンとなり、Dr. Wylie, WD が会長を務めた。学会場には第4回世界麻酔学会と同じくテムズ河畔のRoyal Festival Hall があてられた。参加国は30、参加者は約4,000人と発表された。採用された演題はシンポジウム、ポスター、フィルムを含め999題にのぼっており、8会場に分散され、108セッションに区分されていた。日本からの演題はシンポジウム3題を含め24題であり、40人ほどの参加と思われる。

1. シンポジウム：① 静脈麻酔、② 産科麻酔、③ 薬効力学、④ 麻酔薬の細胞への影響、⑤ 呼吸回路、⑥ 免疫、⑦ 急性疼痛、⑧ 神経・筋接合部、⑨ 局所麻酔薬、⑩ 小児麻酔、⑪ ICU における感染、⑫ 麻酔毒性、⑬ 疼痛治療、⑭ 麻酔と心循環系、⑮ 麻酔の教育と訓練、⑯ 脳神経麻

酔、⑰ 麻酔の質のコントロール、⑱ 集中治療における呼吸の問題、という18のテーマがもたれ、165題の発表がなされた。それぞれ2人の司会者のもとで8～10人の演者の発表を含めて3時間が割り当てられており、十分な討論ができるようになっていた。シンポジウムには大ホール (Concert Hall) と中ホール (Queen Elizabeth Hall) があてられていたが、どの会場も熱心な討論が行われていた。各シンポジウムとも司会者と演者の打ち合わせが持たれており、円滑な進行であると同時に討論のポイントをあらかじめ用意してあったように思われた。シンポジウムはすべて英語、独語、仏語、スペイン語の同時通訳が付いていたが、あまり利用されていなかったと思う。

2. 一般演題：714題のオーラル発表、99題のポスター発表、21題のフィルム発表の計834題が、それぞれ82、4、4のセッションに分けられていた。テーマはシンポジウムと同じものも多く、吸入麻酔、静脈麻酔、局所麻酔、疼痛、硬膜外

麻酔, 麻薬性鎮痛薬, 筋弛緩薬, 低血圧麻酔, 体外循環, 呼吸, 循環, 代謝, 集中治療, 外傷, 熱傷, 教育, コンピューターと麻酔科学のカバーする領域の広いことを示しているようであった。各セッションとも2時間が割り当てられており, 7~9題の演題発表(発表時間は8分)で, 2人の司会者により円滑な討論が行われていた。どのセッションも司会者が各演題についての予備知識をもっており, 会場から質問のない場合には適切なコメントや質問をしていたのが印象的であった。

3. 卒後研修コース: ASA の refresher course や日本麻酔学会の教育講演にあたるもので, 9月8日の午前9時から午後5時まで, 18の講演が3会場に分けられて企画された。テーマは, ①帝王切開の麻酔, ②筋弛緩薬, ③悪性高熱, ④低血圧麻酔, ⑤小児の輸液, ⑥麻酔と腎不全, ⑦虚血脳のプロテクト, ⑧心肺蘇生, などであり, どの会場も満員ではあったが, あまり魅力のあるものはなかった。6つの講演に対して50ポンド(約2万円)という値段は, ASA の1講演5ドルに比較するとかなり高価なものである。

4. その他: 英国麻酔学会の50周年を祝う会ということもあり, 開会式には Princess Margaret が出席されスピーチをしたり, 英国室内オーケストラによるコンサート, テムズ河上における大花火大会, Gala Evening (Covent Garden Market の一部を借り切ってお祭りさわぎをする夕べ), レセプション, さよなら昼食会(テムズ河を船で下りながら昼食)などの行事が企画されていたが, いずれも有料であり, 参加者はこの

ために15万円位を出費することになる。何と高い学会であったことか。学会の世話したホテルも日本よりは高く, サービスも決して良くはなかった。「ロンドンには知識人の街であり, ロンドンにあきることには人生にあきることである」という Samuel Johnson の言葉がある。筆者は9日間ロンドンに滞在したが, 大英博物館も見学したし, 古城も楽しんだ。古い伝統と歴史のある英国を感じたのは確かである, しかし不況と失業者の増加に悩む英国の姿も見たのも事実である。ロンドンにあきたとはいわないまでも長く住む気にはならない街である。英国の麻酔科医達は口をそろえて「1972年の京都での世界麻酔学会は実に素晴らしいものであった。われわれも努力したがそれには及ばなかった。」といった。同時に「あの時の物価の高いのには驚いた。しかし今ではロンドンの方が高いであろう」ともいった。日本企業の進出も盛んであるのは承知していたが, 友人の家に招かれた時に見たテレビはもとより, ステレオ, 車なども日本製であったのには少々おどろいた。良いから使うのだといていた。それでいて対日感情はあまり良くない印象を受けたのは筆者の僻みであったのだろうか。次回のヨーロッパ麻酔学会は1986年ウィーンと決まった。閉会式はスコットランド風にバグパイプの演奏とスコッチウィスキーで学会長とパイプリーダーとの乾杯で終わった。

釵物 修

北里大学医学部麻酔科